

高齢者の生活問題に関する研究 (第5報)

—— 高齢者と家族・社会との関わり ——

磯 部 美 津 子

(被服整理学・染色加工学研究室)

On the Living Problems of the Aged Family (part 5) — Family Relationship and Social Life of the Aged —

Mitsuko ISOBE

1. はじめに

本研究では、高齢者世帯の家庭生活を包括的・総合的に究明しその在り方を探る目的で、まず文献調査を行った。その結果、過疎化と高齢核家族化との進行に寄与する共通の、或いは関連し合う要因として環境的要因・社会的要因・家政的要因・健康的要因・経済的要因・意識的要因が考えられるとした。¹⁾ また、過疎地の高齢核家族世帯の生活上の問題を総合的に捉えて、対策や改善点を見出すためには、7つの方向からの接近が必要であることを述べた。そして、この6要因検証のため、島根県内の30町村において実態調査を行った。その結果、6つの要因それぞれが独立性をもちながらも相互に関連性をもっていることがわかった。^{2),3),4)} また、生活に対する意識の違い、個人差が6つの要因に寄与することで、問題が複雑性を増すことも明らかになった。

これ迄は、要因を中心に据えて、検討してきたが今回は、事象を中心に据え、6つの要因が家族・社会との交流に対してどのような関わりを持っているのか検討を加える。

2. 研究方法

前報までの結果より、他人と交わることによって

内面的・主観的幸福感、充実感が高められ、孤独感⁵⁾は減少する傾向が見られた。そこで、今回は前報までの報告と同一対象について、6要因を構成する因子が、高齢者と家族や社会との関わりの中で、生活に働く作用について、次の1)および2)の二つの接近法で捉えることとする。

なお、その前に、竹中氏、荒井氏、大内氏らに学んで、過疎地に居住する高齢者の生活における6つの要因から事象に関与する因子を次のように設定した。i) 環境的要因を構成する因子として、高齢者は移動を好まない者が多いことからみて、「定住化」と「後継者の存在」とを考える。ii) 社会的要因を構成する因子として、引退後の高齢者は、居住地域における交流を強く求める者が多いことからみて、「再社会化」を考える。iii) 家政的要因を構成する因子として、高齢者は子女との交流を強く求めていることと、若い世代との意識の違い等からみて、「子女との相互訪問」と「家族に関わる価値観」を考える。iv) 健康的要因を構成する因子として、老齢に伴う交流の縮小の1つの原因である「ADL (Activities of Daily Living) の低下」を考える。v) 経済的要因を構成する因子として、交際費の生活費全体に占める割合が大きいことからみて、

「収入と支出の不均衡」を考える。vi) 意識的要因を構成する因子として、過疎地の高齢者中心の世帯では老人の特徴の1つといわれる依存的態度を示せないことから、「精神的自立」を考える。そして、これらが、事象からみて、6要因を構成する共通の因子として適切であることを検討したいと考える。

本研究では、前述のように次の2つの方向から接近することとする。

1) 物資や金銭を介する交流

過疎地居住の高齢者は、地域でのコミュニケーションが欠如し易い。加えて、核家族世帯では、家族間のコミュニケーションも少なく孤独感、疎外感を形成し易いと思われる。調査では、「子女との交流」や「近隣との交流」等における物的交流から充実感、幸福感を味わせる状況を捉える。

2) 心情的な交流

高齢者が自分の存在の意義を見出し、生きていることの喜びを感じていることは重要である。調査では、「住まい方の希望」や「自己の体験の評価」等について掘り下げることににより、生きてきた価値や幸福を感じる心の状態を捉える。

3. 結果および考察

1) 高齢者とコミュニケーション

(1) 家族ネットワークの中で のコミュニケーション

子女との交流の中で最も良い状況をつくりだすと考えられる同居は、全国高齢者の7割強に及んでいる。同居のヨイ点は、高齢者が家庭内で補助的とはいえ役割分担のあること、子女が身近に存在することなどであろう。即ち、高齢者自身の中で同居による精神的安定が得られ、そのことによりモラルが高め

られ、幸福感・充実感を得ることが多いと考えられる。これはまた、縮小された高齢者の交流に家族ネットワークを中心とした質の高い交流の基盤がつくられることでもある。このように、利点の大きい同居形態であるが、過疎地の高齢者では、子女の就業事情により、余儀無く別居することが多い。別居した高齢者中心の世帯と、都市在住の子女との交流は、遠距離居住という地理的条件、子女の住宅事情という物理的条件その他、心理的・経済的条件が相俟って、第1表に示す通り年間数回程度の低接触の関係になっている。しかし、高齢者はこの関係を肯定しているわけではなく、本調査における同居志向は、第2表の通りに高い。即ち、同居志向者は75.5

第1表 交流状況

(%)

年齢別	交流	ほぼ毎日	週一度程度	月一度程度	年数回程度	電話や手紙が主	会わない	子供無し
65歳未満		—	10.3	20.5	61.5	5.1	2.6	—
65歳以上 71歳未満		2.4	7.1	7.1	66.7	9.5	4.8	2.4
71歳以上		—	4.5	9.1	63.6	11.4	11.4	—
全 体		0.8	7.2	12.0	64.0	8.8	6.4	0.8

第2表 同居意識

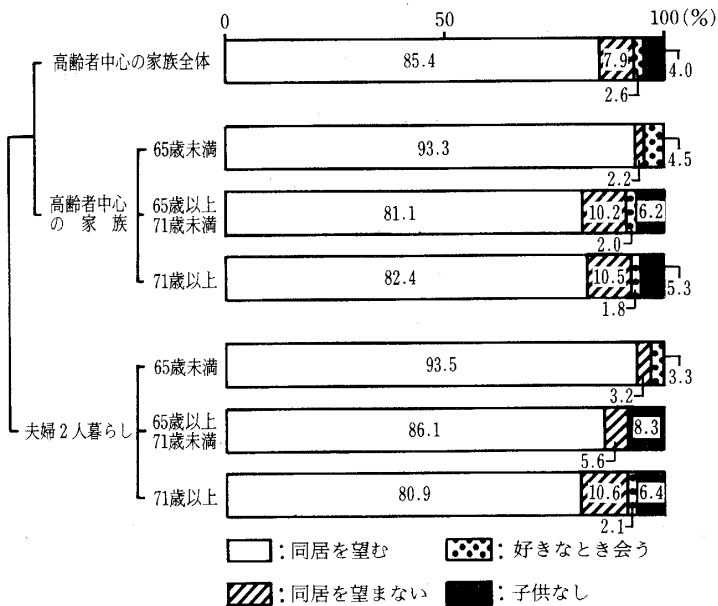
(%)

意識 対象	同居望む	同居望まず	好きな時 会	同居 している	子供無し
全 体	75.5	7.9	2.7	9.9	4.0

第3表 高齢者中心家族の住まい方についての願望

(%)

年代別 ・願望別	性別・現在の 家族形態別	男 性				女 性			
		夫2人	婦人	未婚同居	両同居	夫2人	婦人	1人暮らし	未婚同居
65歳未満	同居	93.5	33.3	83.3	88.5	50.0	40.0	71.4	
	別居	3.2	—	—	3.8	—	6.7	14.3	
	其他	3.3	66.7	16.7	7.7	50.0	53.3	14.3	
65歳以上 71歳未満	同居	86.1	57.1	—	77.3	66.7	100.0	33.3	
	別居	5.6	14.3	33.3	9.1	33.3	—	—	
	其他	8.3	28.6	66.7	13.6	—	—	66.7	
71歳以上	同居	80.9	—	25.0	87.5	—	—	—	
	別居	10.6	—	—	12.5	100.0	—	—	
	其他	8.5	100.0	75.0	—	—	100.0	100.0	
全 体	同居	86.0	33.3	46.2	83.9	50.0	36.8	46.2	
	別居	7.0	5.6	7.7	7.1	33.3	5.3	7.7	
	其他	7.0	61.1	46.1	9.0	16.7	57.9	46.1	

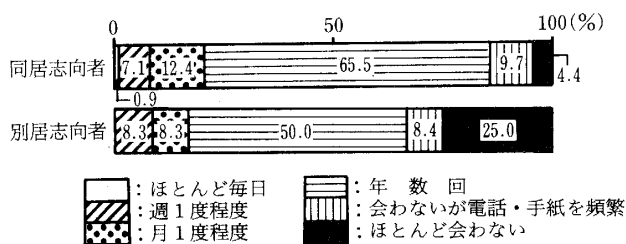


第1図 子女家族との同居に対する願望

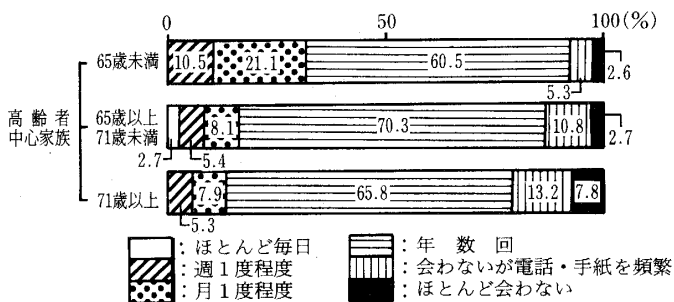
第4表 同居意識

年齢別		同居意識 (%)				
		同居を望む	近居を望む	別居を望む	子供無し	その他
男性	60歳～64歳	71.5	13.9	1.1	2.1	11.8
	65歳～69歳	74.6	10.2	—	5.1	10.2
	70歳～74歳	65.9	24.4	—	4.9	4.9
女性	60歳～64歳	50.9	13.5	3.4	20.3	11.9
	65歳～69歳	58.2	25.7	—	12.9	3.2
	70歳～74歳	52.0	36.0	—	12.0	—
全 体		62.2	20.6	0.8	9.6	7.0

経済企画庁国民生活局「昭和60年度国民生活選好度調査」（昭和60年4月）



第2図 高齢者中心の家族における長子との交流



第3図 同居志向者と長子との交流（年齢別）

%あり、積極的同居志向を持たない者は10.6%であった。これを家族形態別、男女別、年齢別に整理すると、第3表、第1図の通りである。現在「夫婦二人暮らし」の同居志向者は、男性 86.0%、女性 83.9%と多いが「未婚子との同居者」および「親との同居者」では、それぞれ男女を合わせて35.1%、46.2%と同居志向が低い。また、65歳未満の者に同居志向者が多い。別居志向者は加齢に伴って漸増傾向にある。また、昭和60年度国民生活選好度調査⁹⁾によると65歳から74歳までの同居志向は第4表の通りである。近居を含めた同居・家族依存志向は82.5%と本調査と同様に高い値を示している。また、同上調査では、女性に近居志向が高く、本調査の対象者より自立意識が高いとみられる。

次に、同居志向者および別居志向者別に、長子との交流状況を示すと第2図の通りである。月一度以上の交流を持つ者は、同居志向者20.4%、別居志向者16.6%と3.8ポイントの差である。しかし、別居志向者の「ほとんど会わない」は同居志向者より20.6ポイントも多い。これは、形態的別居と交流頻度における疎遠が相乗作用を起こした結果と思われる。また、同居志向の高齢者中心の家族

における年齢別長子との交流頻度は、第3図の通りであって、月一度以上の交流は若い程多く、65歳未満では71歳以上より18.4ポイント多い。また、「ほとんど会わない」は高齢者程多く、71歳以上が65歳未満より5.2ポイント多い。これは、高齢になる程、前述の6つの要因の諸因子による作用が強まることにより、高齢者側からの働きかけが少なくなるためと思われる。この現象はまた、「電話・手紙による交流」を頻繁に行う者が高齢者に多いことでも示されている。子女との同居志向別および交流状況別にみた将来の生活についての考えは、第5表に示す通りである。同居志向者で月一度以上の交流を持つ者の56.4%が「夫婦二人で暮らす」と答えている。また「年数回」や「電話・手紙による交流が主」とする交流頻度の少ない者は、

第5表 住まい方への願望・交流の現状と暮らし方への将来設計（年齢別）

(%)

住まい方への願望		同居希望者				別居希望者			
暮らし方の将来設計	年齢別 交流の現状	65歳未満	65歳以上 71歳未満	71歳以上	全 体	65歳未満	65歳以上 71歳未満	71歳以上	全 体
夫婦又は一人 で暮らす	週一度程度	50.0	66.7	50.0	55.6	—	—	—	—
	月一度程度	37.5	100.0	66.7	57.1	—	—	100.0	100.0
	年 数 回	57.1	72.7	81.5	71.4	100.0	100.0	75.0	80.0
	電話・手紙	50.0	66.7	60.0	60.0	—	100.0	—	100.0
	交流無し	—	100.0	66.7	60.0	—	100.0	100.0	100.0
考えていない	週一度程度	50.0	33.3	50.0	44.4	—	100.0	—	100.0
	月一度程度	37.5	—	33.3	28.6	—	—	—	—
	年 数 回	42.9	22.7	18.5	27.1	—	—	—	—
	電話・手紙	50.0	33.3	40.0	40.0	—	—	—	—
	交流無し	100.0	—	33.3	40.0	—	—	—	—
老人ホーム等 で暮らす	年 数 回	—	4.5	—	1.4	—	—	—	—
	子 供 無 し	—	100.0	—	100.0	—	—	—	—
親戚縁者と共	年 数 回	—	—	—	—	—	—	25.0	20.0
同居予定	月一度程度	25.0	—	—	14.3	—	—	—	—

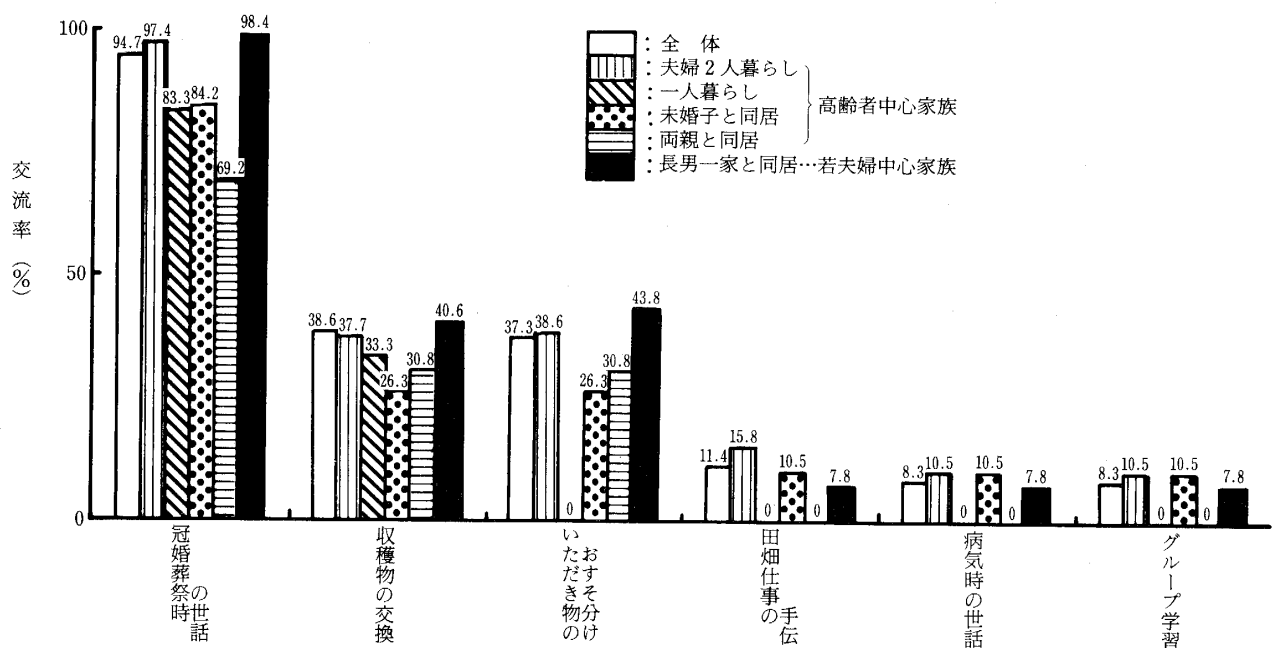
「夫婦二人で暮らす」が65.7%と交流頻度の多い者より9.3ポイント多く、年齢が高い程、また、交流回数の少ない者程「夫婦二人で暮らす」と考えている者が多かった。

高齢者の同居志向は高いけれども、現実に対応する姿勢がみられること、また、子女との交流回数が

少ないことは、子女の「家族離れ」を示すものと考えられる。

(2) 社会ネットワークの中でのコミュニケーション

地域社会との交流の内容は、第4図の通りである。「冠婚葬祭時の世話」が圧倒的に多く、続いて



第4図 近 隣 と の 交 流

第5図 金品にかかわる交流状況（物品交流の方法別）

高 齢 者 中 心 の 家 族								物品交流の方法	若 夫 婦 中 心 の 家 族								
一般の 寄 付	孫への志	近 隣 者			近 親 者				近 親 者			近 隣 者			孫への志	一般の 寄 付	
		病氣見舞	不祝儀	祝 儀	病氣見舞	不祝儀	祝 儀		祝 儀	不祝儀	病氣見舞	祝 儀	不祝儀	病氣見舞			
							□●	酒	米		○●						
△		○△□	○	○△□		○△▲			500円以下					◇△▲			
●◇▲		●◇▲		●	○△□	●◇▲	△		500～1,000円				○△▲	○●□	○△◇		△▲
□					●◇▲				1,000～2,000円	△□	△□◇	○△□	●□◇		●□		◇
	□						○□●		2,000～3,000円	○●▲						△□	
									3,000～5,000円								
									5,000～7,000円								
	●◇▲						◇	7,000 ～10,000円	◇					○●◇	○●		
	○							10,000 ～30,000円									
								50,000円以上									
								物 品									
								無									
○								息子に任す								○	

○：松江地区平均値 △：出雲地区平均値 □：浜田地区平均値 ●：益田地区平均値 ◇：隠岐地区平均値 ▲：全 体

第6表 生活の中で満足感を味わう事柄

(%)

形態別	性別	年齢別	項目	仕 事	趣 味	生産活動	社会活動	家庭円満	友人付合	充実感無し	無 解 答
高 齢 者 中 心 家 族	男 性	65 歳 未 満		14.0	23.3	34.9	34.9	2.3	2.3	4.7	—
		65 歳 以 上		19.6	23.9	41.3	6.5	—	6.5	2.2	—
		71 歳 未 満		7.1	28.6	33.9	5.4	3.6	5.4	14.3	1.8
		71 歳 以 上		7.1	28.6	33.9	5.4	3.6	5.4	14.3	1.8
	女 性	全 体		13.1	25.5	36.6	9.7	2.1	4.8	7.6	0.7
		65 歳 未 満		7.9	34.2	32.9	3.9	1.3	9.2	7.9	2.6
		65 歳 以 上		7.8	37.3	23.5	3.9	3.9	7.8	11.8	3.9
		71 歳 未 満		—	26.1	21.7	13.0	8.7	13.0	13.0	4.3
若 夫 婦 中 心 家 族	男 性	71 歳 以 上		—	26.1	21.7	13.0	8.7	13.0	13.0	4.3
		全 体		6.7	34.0	28.0	5.3	3.3	9.3	10.0	3.3
	女 性	65 歳 未 満		—	33.3	50.0	—	8.3	8.3	—	—
		65 歳 以 上		9.5	19.0	42.9	4.8	14.3	9.5	—	—
		71 歳 未 満		10.0	16.7	40.0	10.0	6.7	10.0	6.7	—
		71 歳 以 上		10.0	16.7	40.0	10.0	6.7	10.0	6.7	—
	女 性	全 体		7.9	20.6	42.9	6.3	9.5	9.5	3.2	—
		65 歳 未 満		2.7	27.0	29.7	—	18.9	10.8	5.4	5.4
		65 歳 以 上		—	50.0	31.3	—	6.3	—	6.3	6.3
		71 歳 未 満		—	29.2	20.8	—	20.8	28.0	—	—
		71 歳 以 上		—	29.2	20.8	—	20.8	28.0	—	—
		全 体		1.3	32.5	27.3	8.3	16.9	11.7	3.9	3.9

「収穫物の交換」や「いただき物のおすそ分け」をしている。日常生活にかかわる身近な交流の多いことがわかる。また、金品にかかわる交流の状況は、第5図の通りである。図中の記号の位置は表示地域の平均値を示す。当然のことながら、近親者が近隣者より「1ランク」から「2ランク」高額を示している。地域別では、高齢者中心の家族において「祝儀」「不祝儀」「孫への志」および「寄付」に地域差がみられる。若夫婦中心の家族では、近親者の

「祝儀」および近隣への「病気見舞」「孫への志」「寄付」に地域差がみられる。「孫への志」は家族形態にかかわらず多額を示している。生活改善の大きな課題となっている金品を伴う交流について、本調査でも苦痛を訴える声は多かった。しかし、実際には有効かつ全員が実践できるような良い方策は生まれ難いようである。

人びとは地域での集会に参加することで地域コミュニティの形成が図れ定着性がより一層強まると

第7表 生活の中で熱中出来る事柄の活動項目別割合

(%)

活動項目別			一次活動	二次活動	三次活動	三 次 活 動 内 訳						
家族形態別	性別	年齢別				学習活動	趣味・娯楽	奉仕活動	交 際	寛 ぎ	その他	
家 族 類 型 別	高 齢 者 中心家族	男	65歳未満	5.9	22.5	71.6	34.9	56.2	4.1	13.7	4.1	1.4
			65歳以上 71歳未満	4.9	37.4	57.7	39.1	63.4	4.2	2.8	4.2	－
			71歳以上	9.2	26.7	64.2	26.2	71.4	7.8	7.8	2.6	3.9
			全 体	6.7	29.3	64.1	26.2	63.8	5.4	8.1	3.6	1.8
		女	65歳未満	4.3	30.7	65.0	22.4	55.7	1.9	16.0	9.4	0.9
			65歳以上 71歳未満	5.1	32.2	62.7	13.7	68.9	2.7	12.2	6.8	－
			71歳以上	8.2	28.6	63.3	21.7	54.8	9.7	9.7	6.5	3.2
			全 体	5.2	30.9	63.9	19.3	60.2	3.3	13.7	8.1	0.9
	若 夫 婦 中心家族	男	65歳未満	12.1	27.3	60.6	25.0	50.0	5.0	15.0	15.0	－
			65歳以上 71歳未満	5.9	20.6	73.5	23.8	62.0	4.0	6.0	18.0	－
			71歳以上	14.1	28.2	57.7	26.7	57.8	6.7	8.9	8.9	－
			全 体	10.6	25.1	64.2	25.4	58.3	5.2	8.7	13.9	－
		女	65歳未満	4.3	27.2	68.5	21.6	41.3	－	14.3	31.7	－
			65歳以上 71歳未満	10.8	35.1	54.1	－	85.0	－	5.0	10.0	－
			71歳以上	5.8	23.1	71.2	12.5	59.5	2.7	13.5	16.2	－
			全 体	6.1	27.6	66.3	14.3	54.2	0.8	12.5	23.3	－
全 体	男	65歳未満	7.4	23.7	68.9	32.7	54.8	4.3	14.0	6.5	1.1	
		65歳以上 71歳未満	5.2	31.4	63.4	34.3	62.8	4.1	4.1	9.9	－	
		71歳以上	11.1	27.3	61.6	15.1	66.4	7.4	8.2	4.9	2.5	
		全 体	8.0	27.9	64.1	26.0	61.9	5.4	8.3	7.1	1.2	
	女	65歳未満	4.3	29.4	66.3	22.1	50.3	1.2	15.4	17.8	0.6	
		65歳以上 71歳未満	6.5	32.9	60.6	10.4	72.3	2.1	10.6	7.4	－	
		71歳以上	6.9	25.7	67.3	17.0	57.4	5.9	11.8	11.8	1.5	
		全 体	5.5	29.7	64.8	17.6	58.0	2.4	13.3	13.6	0.6	

註）活動項目は総務庁「社会生活基本調査」（昭和56年）に基づいて分類した

いわれる。本調査では、居住地域にとけこむことで満足感を味わう事柄として第6表のようなことが揚げられた。「生産活動（収入を伴う。）」に満足感を持つ者は男性、殊に若夫婦中心の家族に多い。また、「趣味」は男性より女性に多く「仕事（収入を伴わない。）」は女性より男性に多い。「友人付き合い」は女性に多い。これらの項目は、積極的に社会参加していることを示すものであるけれども、「生活に充実感がなく、生きがいが見つめない」とする者が、高齢者中心家族の男性に7.6%、同・女性に10.0%あった。また、生活の中で熱中できる事柄を整理すると、第7表の通りである。この表における項目分類は、総務庁の社会生活基本調査で用いられた一次活動（生理的に必要な事柄）、二次活動（義務的な事柄）、三次活動（余暇活動）によっている。ただし、本研究では、一次活動には「好きな物を食べる」「好きな物を飲む」等、二次活動には「野菜作り」「育苗・育牛」「野良に出て働く」「収入を得る」および「農・漁業技術の向上」を加え

た。満足できる事柄では家族形態に関わりなく、三次活動が60%以上を示している。三次活動の内訳を見ると「趣味・娯楽」が多く、ついで「学習活動」が続く。「交際」に満足を感じる者は男性より女性に多い。しかし、65歳未満では男女が同程度を示している。

高齢者の地域社会における活動は、「暇つぶし」としてではなく、より目的的で「生きがい」と結びついた価値観と創造的態度で取り組んでいることがうかがえた。

2) 高齢者の心情

人間の心情は、微妙であり、計り知れないものが存在する。本調査の面接において、過疎地の居住者に一層微妙なものを感じたが、ここでは家庭生活と社会生活とに分けて考えることとする。

(1) 家庭生活における心情

高齢者中心の家族について居住志向別に「住まい」「家計」「食事」の志向をみると、第8表のようである。同居志向者では、「住まい」「家計」「食

第8表 高齢者中心家族における同・別居願望別、世帯を一にした時に希望する住居・家計・食事のあり方 (%)

願望別	性別	住み方	○	○	○	○	○	○	△	△	△	△	△	△	無 回 答
		家計	○	△	△	○	×	×	○	△	×	△	△	×	
		年齢別食事	○	○	△	△	△	×	○	○	○	△	×	×	
同居	男性	65歳未満	69.4	8.3	—	—	—	—	8.3	2.8	—	2.8	—	8.3	—
		65歳以上 71歳未満	48.6	14.3	2.9	—	—	5.7	8.6	5.7	5.7	—	—	8.6	—
		71歳以上	61.5	5.1	2.6	—	—	—	5.1	5.1	2.6	2.6	—	15.4	—
		全 体	60.0	9.1	1.8	—	—	1.8	7.3	4.5	2.7	1.8	—	10.9	—
	女性	65歳未満	62.1	10.3	1.7	1.7	—	1.7	3.4	1.7	1.7	3.4	1.7	10.3	—
		65歳以上 71歳未満	47.4	7.9	2.6	—	2.6	2.6	10.5	7.9	—	2.6	—	15.8	—
		71歳以上	71.4	7.1	7.1	—	—	—	—	7.1	—	—	—	7.1	—
		全 体	58.2	9.1	2.7	0.9	0.9	1.8	5.5	4.5	0.9	2.7	0.9	11.8	—
別居	男性	65歳未満	—	—	—	—	—	—	100.0	—	—	—	—	—	—
		65歳以上 71歳未満	25.0	—	—	—	—	—	25.0	—	—	—	—	—	50.0
		71歳以上	20.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	80.0
		全 体	20.0	—	—	—	—	—	20.0	—	—	—	—	—	60.0
	女性	65歳未満	—	—	—	—	—	—	50.0	—	—	—	—	—	50.0
		65歳以上 71歳未満	—	—	—	—	—	—	—	20.0	—	—	—	20.0	60.0
		71歳以上	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	100.0
		全 体	—	—	—	—	—	—	16.7	8.3	—	—	—	8.3	66.7

注) 記号について…… ○印は同一、△印は一部一緒、×印は別々 を示す。

事」共「一緒」を望む者が男性の60.0％、女性の58.2％ある。また、「一部一緒」を含めた家族に依存志向を示す者は、男性84.5％、女性83.6％と高い。近居している自立志向者では、家族依存志向を持つ者が男性に10.9％、女性に11.8％あった。また、別居志向者では「別居を希望しているから考えられない」とする者が多かった。

若夫婦中心の家族における「住まい」「家計」「食事」の現況は、第9表の通りである。若夫婦に依存型の同居生活者は、「住まい」「食事」を一緒にする者がそれぞれ93.7％あり、「家計」は87.3％あった。「住まい」については、加齢に伴って減少し「家計」「食事」では、漸増傾向を示した。

次に、生活の中で自分に課している事柄は、第10表の通りである。高齢者中心の家族では「自分のことは自分で行う」が45.7％あり、加齢に伴って漸増している。これに対し、若夫婦中心の家族では31.6％と14.1ポイント少ない。また、「生産活動を充実させる」という生活への積極的姿勢を示した者は、

全体的にみると17％程度で家族形態による差は見られない。しかし、71歳以上では、若夫婦中心の家族において20.1ポイント多い。これは「生産活動」において、高齢者に見合った役割が存在することと、高齢者自身が若い時には若夫婦を立てる気持ちが強いことによるものと思われる。第11表によって地域別に見ると、無回答者が出雲・益田地区に多く、これは現状維持を望むからとみられる。隠岐地区では「自分のことは自分で行う」が家族形態にかかわらず高い値を示した。また、益田地区の若夫婦中心の家族において「生産活動を充実させる」と答えた者が0であったのは、若夫婦に経営を委譲した後の気楽さからとも推察できる。

高齢者に自由に語ってもらった事柄を整理すると、第12表に示す通りである。無回答者が多いが、高齢者中心の家族において多く出たのは、子女の遠隔地就業が失敗であったとの反省であって、全体の14.6％を示した。加齢に伴って減少しているのは、

多かったのは、家族が仲良く大過なく過ごしてきたことの満足感であって、全体の17.1％を示した。これは高齢者中心の家族より7.2ポイント高かった。第13表により地域別にみると「子女の遠隔地就業への反省」が益田地区・浜田地区に多い。「家族に関わる事への満足感」は浜田地区に

第9表 若夫婦中心の家庭における住居・家計・食事の現状況 (%)

項目 年齢 現況	住 居		家 計			食 事		
	同 棟	別 棟	一 緒	一部一緒	別 々	一 緒	一部一緒	別 々
65歳未満	100.0	—	75.0	25.0	—	91.7	—	8.3
65歳以上 71歳未満	95.2	4.8	90.4	4.8	4.8	90.5	4.8	4.8
71歳以上	90.0	10.0	90.0	6.6	3.4	96.7	3.3	—
全 体	93.7	6.3	87.3	9.5	3.2	93.7	3.2	3.2

第10表 生活の中で自分に課している事柄 (年齢別)

(%)

事 柄	高 齢 者 中 心 家 族				若 夫 婦 中 心 家 族			
家族形態別 年齢別	65歳未満	65歳以上 71歳未満	71歳以上	全 体	65歳未満	65歳以上 71歳未満	71歳以上	全 体
自分の事は自分で行う	40.0	40.8	54.4	45.7	33.3	43.5	23.7	31.6
生産活動を充実させる	24.4	24.5	5.3	17.2	13.3	21.7	15.8	17.1
無 回 答	35.6	34.7	40.4	37.1	53.3	34.8	60.5	51.3

第11表 生活の中で自分に課している事柄 (地域別)

(%)

事柄	高 齢 者 中 心 家 族						若 夫 婦 中 心 家 族					
家族形態別 地域別	松江地区	出雲地区	浜田地区	益田地区	隠岐地区	全 体	松江地区	出雲地区	浜田地区	益田地区	隠岐地区	全 体
自分の事は自分で行う	45.9	29.6	50.0	50.0	51.7	45.7	36.4	22.6	35.7	33.3	45.5	31.6
生産活動を充実させる	16.2	7.4	38.9	4.5	10.3	17.2	27.3	6.5	42.9	—	18.2	17.1
無 回 答	35.1	66.7	11.1	45.5	37.9	37.1	36.4	71.0	21.4	66.7	36.4	51.3

第12表 自己評価について (年齢別)

(%)

家族形態別	項目 年齢別	子 女 の 遠隔地就業 への反省	資格・技術 保有への 意 義	就労と子育て 両立への 反 省	家 族 に 関わる事 への満足感	住 宅 獲 得 への無念さ	平 穏 無 事 への満足感	年 金 授 受 への反省	定住地決定 への反省	無 回 答
高齢者中 心の家族	65歳未満	22.2	2.2	2.2	6.7	2.2	2.2	2.2	—	60.0
	65歳以上 71歳未満	12.2	4.1	—	14.3	—	4.1	2.0	4.1	59.2
	71歳以上	10.5	—	—	8.8	1.8	3.5	1.8	1.8	71.9
	全 体	14.6	2.0	0.9	9.9	1.3	3.3	2.0	2.0	64.2
若夫婦中 心の家族	65歳未満	6.7	6.7	—	13.3	—	6.7	—	—	66.7
	65歳以上 71歳未満	—	8.7	—	21.7	—	4.3	—	—	65.2
	71歳以上	—	5.3	—	15.8	—	—	—	—	78.9
	全 体	1.3	6.6	—	17.1	—	2.6	—	—	72.4

第13表 自己評価について (地域別)

(%)

地域別	項目	子 女 の 遠隔地就業 への反省	資格・技術 保有への 意 義	就労と子育て 両立への 反 省	家 族 に 関わる事 への満足感	住 宅 獲 得 への無念さ	平 穏 無 事 への満足感	年 金 授 受 への反省	定住地決定 への反省	無 回 答
松江地区広域町村圏		4.2	6.3	—	12.5	4.2	10.4	4.2	2.1	56.3
出雲地区広域町村圏		5.2	5.2	—	12.1	—	—	—	—	77.6
浜田地区広域町村圏		20.0	4.0	2.0	26.0	—	4.0	—	2.0	42.0
益田地区広域町村圏		25.8	—	—	3.2	—	—	3.2	3.2	64.5
隠岐地区広域町村圏		—	—	—	2.5	—	—	—	—	97.5
全 地 域		10.1	3.5	0.4	12.3	0.9	3.1	1.3	1.3	67.0

第14表 地域社会への要望 (地域別)

(%)

家族形態別 地域別 要望事項	高 齢 者 中 心 家 族						若 夫 婦 中 心 家 族					
	松江地区	出雲地区	浜田地区	益田地区	隠岐地区	全 体	松江地区	出雲地区	浜田地区	益田地区	隠岐地区	全 体
交 際 費 改 善	10.8	7.4	16.7	13.6	13.8	12.6	—	6.5	28.6	—	9.1	9.2
生 活 苦 の 緩 和	13.5	3.7	47.2	18.2	3.4	18.5	18.2	—	7.1	—	—	3.9
若 い 人 と の 交 流	2.7	3.7	5.6	—	3.4	3.3	9.1	—	7.1	11.1	—	3.9
子 女 の 依 頼 心 を 直 す	—	—	2.8	—	3.4	1.3	9.1	—	—	—	—	1.3
村 落 内 で 話 合 う 機 会	13.5	3.7	2.8	—	3.4	5.3	—	16.1	7.1	11.1	—	5.3
婦 人 会 活 動 の 改 善	5.4	—	5.6	—	—	2.6	—	—	7.1	—	—	1.3
無 回 答	51.4	85.2	19.4	68.2	72.4	56.3	63.6	87.1	42.9	77.8	90.9	75.0

多く「平穏無事に送れたことへの満足感」は松江地区に多い。

面接の印象としては、子女への潜在的依存志向は高い。しかし、子女が遠隔地就業の為、疎遠になり易く、その結果、子女の就業に対する反省が生じ、「自分のことは自分で」というやむをえずの自立意識で自分をふり立たせるといふ複雑な心情が示された。

(2) 社会生活に対する心情

高齢者では居住地域との結びつきを大切に考える者が多いので、社会への要望を整理すると、第14表に示す通りであった。無回答者が多いが、高齢者中心の家族では「生活苦の緩和」「交際費の改善」が多い。若夫婦中心の家族では「交際費の改善」が多いけれども、無回答が75%存在した。地域別にみると、浜田地区の高齢者中心の家族では「生活苦の緩

和」が特に多く、「交際費の改善」を掲げるものも多い。また、松江地区の高齢者中心の家族では「生活苦の緩和」「村落内で話合う機会を作る」「交際費の改善」が多く、益田地区の高齢者中心の家族では「生活苦の緩和」「交際費の改善」が多い。隠岐地区の高齢者中心の家族でも「交際費の改善」を訴える者が多い。若夫婦中心の家族では、松江地区で「生活苦の緩和」、出雲地区で「村落内で話合う機会を作る」、浜田地区で「交際費の改善」、益田地区で「若い人との交流」「村落内で話合う機会を作る」を訴える者が多い。これは、高齢者が社会活動をしたいこと、加えて居住地域での温かい人間関係を求めていることとの表れと思われる。しかし、この場合でも若夫婦中心の家族で75%、高齢者中心の家族で56.3%の無回答があり、第15表に示すように

年齢が高くなる程多い。これは加齢に伴って地域社会における活動に参加しにくくなり問題意識が失われるためと思われる。

次に、行政への要望事項を整理すると、第16表に示す通りである。最も多かったのは「地域に密着した行政策」で、1/4ほどの支持があった。また、10%以上の要望のあったものは「安定した農・漁業政策」であった。高齢者中心の家族では「後継者対策」が求められている。地域別にみると、無回答者の多い地域もあり、第1位に支持されている項目には地域差が見られた。ここに用いた選択肢は、今までに繰り返し言われている課題であって、早急な方策が重ねて求められている。

家族を含めた若い人への希望事項を整理すると、第17表に示す通りである。「礼儀」についての意見

第15表 地域社会への要望（年齢別）

（%）

要望事項	高 齢 者 中 心 家 族				若 夫 婦 中 心 家 族			
	65歳未満	65歳以上 71歳未満	71歳以上	全 体	65歳未満	65歳以上 71歳未満	71歳以上	全 体
交 際 費 の 改 善	17.8	6.1	14.0	12.6	13.3	17.4	2.6	9.2
生 活 苦 の 緩 和	15.6	22.2	17.5	18.5	—	4.3	5.3	3.9
若 い 人 と の 交 流	6.7	—	3.5	3.3	6.7	4.3	2.6	3.9
子 女 の 依 頼 心 を 直 す	—	2.0	1.8	1.3	—	4.3	—	1.3
村 落 内 で 話 合 う 機 会	4.4	12.2	—	5.3	—	8.7	5.3	5.3
婦 人 会 活 動 の 改 善	8.9	—	—	2.6	—	—	2.6	1.3
無 回 答	46.7	57.1	63.2	56.3	80.0	60.9	81.6	75.0

第16表 行政への要望（地域別）

（%）

要望事項	高 齢 者 中 心 家 族						若 夫 婦 中 心 家 族					
	松江地区	出雲地区	浜田地区	益田地区	隠岐地区	全 体	松江地区	出雲地区	浜田地区	益田地区	隠岐地区	全 体
現金収入の道をつくる	—	—	8.3	4.5	—	2.6	—	—	7.1	—	—	1.4
安定した農・漁業政策	5.4	—	16.7	4.5	34.5	12.6	18.2	—	14.3	22.2	36.4	18.2
後継者対策	2.7	14.8	33.3	22.7	3.4	15.2	—	9.7	7.1	—	—	3.4
Uターン就労場所確保	5.4	—	2.8	4.5	—	2.6	—	—	—	—	—	—
物質優先主義改善	2.7	—	—	—	—	0.7	—	—	—	—	—	—
高齢者活用を考慮	8.1	—	—	—	—	2.0	—	3.2	—	—	—	0.6
安定した高齢者対策	—	—	19.4	9.1	—	6.0	18.2	—	14.3	—	—	6.5
地域に密着した行政策	37.8	29.6	13.9	13.6	24.1	24.5	18.2	9.7	35.7	44.4	27.3	27.1
現状に満足	—	11.1	—	—	10.3	4.0	—	9.7	7.1	—	9.1	5.2
保険料を安く	2.7	—	—	—	—	0.7	9.1	—	—	—	—	1.8
無 回 答	32.4	48.1	5.6	40.9	27.6	29.1	36.3	67.7	14.4	33.4	27.2	35.8

第17表 若い人への希望

(地域別)

(%)

形態別	地域別	項目	礼儀	年寄りの意見聴く	転しな職い	内面を充実を	家族仲良	自分に厳しく	無回答
高齢者 中心家族	松江地区		35.1	10.8	2.7	13.5	2.7	2.7	43.2
	出雲地区		11.1	11.1	—	3.7	—	—	77.8
	浜田地区		8.3	16.7	—	5.6	—	25.0	44.4
	益田地区		4.5	4.5	—	—	—	4.5	86.4
	隠岐地区		3.4	—	—	—	—	3.4	93.1
	全地区		13.9	9.3	0.7	5.3	0.7	7.9	62.3
若夫婦 中心家族	松江地区		9.1	18.2	—	—	27.3	9.1	36.4
	出雲地区		9.7	16.1	—	3.2	6.5	—	64.5
	浜田地区		35.7	—	7.1	—	—	21.4	35.7
	益田地区		11.1	—	—	—	11.1	11.1	66.7
	隠岐地区		—	—	—	—	—	9.1	90.9
	全地域		13.2	9.2	1.3	1.3	7.9	7.9	59.2

は高齢者中心の家族における松江・出雲地区に、「年寄りの意見に耳を傾ける」は浜田・出雲・松江地区に、「内面を充実させる」は松江地区に、「自分に厳しく」は浜田地区に多くみられた。また、若夫婦中心の家族では、「礼儀」についての意見は浜田・益田地区に、「年寄りの意見に耳を傾ける」は松江・出雲地区に、「家族仲良く」は松江・益田地区に、「自分に厳しく」が浜田・益田地区にみられた。

これら、社会への要望、行政への要望、若者への希望は、体験を通して考えられた意見、希望であるだけに問題は重要である。また、無回答者が多かったことは、積極的に問題提起するのではなく、与えられた状況に適応しようとする心情を示していると考えられる。

4. まとめ

これ迄、高齢者世帯の家庭生活を包括的・総合的に究明し、その在り方を探る試みとして、環境的要因・社会的要因・家政的要因・健康的要因・経済的要因・意識的要因を全生活領域の規定要因として取り上げ、要因との関わりにおいて実態調査を行い検討を加えてきた。今回は、6つの要因から、過疎地高齢者の交流に関わっていると考えられる因子を他論文に学んで設定し、本調査における高齢者と家族や社会との関わりの中で検討した結果、次の結論を得た。

1) 高齢者の同居志向は高いけれど、子女が遠距離に居住するため将来の生活は夫婦二人だけで暮らすという現実に対応する姿勢がみられることと、若夫婦中心の家族では依存型の同居生活者の多いこと等が示された。このことより環境的要因を構成すると考えた「定住化」「後継者の存在」は、事象を構成する因子でもあると考えてよいと思われる。

2) 高齢者の地域社会における活動が「暇つぶし」としてではなく、より目的的で「生きがい」と結びついた価値観により創造的態度で取り組んでいることと、高齢者が社会活動をしたいと考えていることや居住地域で温かい人間関係を結びたいと考えていること等が示された。このことより社会的要因を構成すると考えた「再社会化」は、事象を構成する因子でもあると考えてよいと思われる。

3) 高齢者程、子女と会う回数が少なく、電話や手紙の交流に止まっていることと、子女の「家族離れ」の傾向がみられること、高齢者の同居家族員を含めた若い人への希望事項等からみて、家政的要因を構成すると考えた「子女との相互訪問」や「家族に関わる価値観」は、事象を構成する因子でもあると考えてよいと思われる。

4) 子女との交流において、高齢になる程、「電話・手紙による交流」は頻繁に行うが、会う回数は少なくなることと、年齢が高くなる程、地域社会における活動に参加しにくくなる傾向を示したこと等からみて、健康的要因を構成すると考えた「ADL

の低下」は、事象を構成する因子でもあったと考えてよいと思われる。

5) 金品を伴う交流で、苦情を訴える者が多いことと、高齢者中心の家族に「生活苦の緩和」「交際費の改善」を訴える者が多いこと等により、経済的要因を構成すると考えた「収入と支出の不均衡」は、事象を構成する因子でもあったと考えてよいと思われる。

6) 家族との関わりの中で、高齢者の子女への潜在的依存志向が高いけれど、子女が遠隔地就業のため「自分のことは自分で」というやむをえずの自立意識で自分を奮起させていること等からみて、意識的要因を構成すると考えた「精神的自立」は、事象を構成する因子でもあったと考えてよいと思われる。

今回の調査研究により高齢者は、近隣・子女との交流の中で、自己主張をおさえて、人びとの中に溶け込み、懸命に生きている姿がみられた。これは、孤独をおそれる高齢者の行動と思われるが、調査では生活の限られた一部しか明らかに出来なかった。今後、生活構造について検討を行い研究を進めたいと思う。

本研究をすすめるにあたり終始ご懇切なご指導を賜りました横浜国立大学 三東純子教授に厚く御礼申し上げます。また、この調査にご協力いただいた島根県農業指導課の方々をはじめ関係各地区の農業改良普及所、町村役場、農協の方々、調査に応じてくださった方々に衷心より感謝の意を表します。

文 献

- 1) 磯部美津子：本誌，21，（1983）
- 2) 磯部美津子：本誌，22，（1984）
- 3) 磯部美津子：本誌，23，（1985）
- 4) 磯部美津子：本誌，24，（1986）
- 5) 竹中和郎：ジュリスト総合特集，No.12，293～303（1978）
- 6) 荒井保男：ジュリスト総合特集，No.12，124～128（1978）
- 7) 大内雅利：社会老年学，No.15，14～26（1982）
- 8) 経済企画庁国民生活局編：日本の家庭，大蔵省印刷局，69（1983）
- 9) 経済企画庁国民生活局編：長寿社会へ向けての生活選択，大蔵省印刷局，156（1986）

（昭和61年10月31日受理）